

## 楽浪土城址出土の土器(上)

——楽浪土城研究その2——

谷 豊 信

### はじめに

筆者は前稿において、1935年と1937年（昭和10・12年）に当時の朝鮮古蹟研究会が行った平壤市南郊の楽浪土城址の発掘調査に関する資料をまとめ、未公表の資料にもとづいて従来の報告を補足し、あわせて遺構に関して若干の考察を試みた（文献6）。今後は東京大学文学部考古学研究室（以下本研究室と呼ぶ）に保管されている楽浪土城址の出土品を紹介し、考察を行う予定である。本稿ではまず出土品のほぼ半数を占める土器をとりあげることとする。

土器の記述に入る前に、本研究室に保管されている楽浪土城址の出土品について簡単に説明しておきたい。

調査関係者が物故された今日では細かい経緯はたどることができないが、三次に亘った発掘調査で取り上げられた遺物の恐らくほとんどすべてが発掘後間もなく本研究室に運ばれて保管されることになり、今日に至っているものと思われる。この間、戦前に出版された概報（文献9・10）と1965（昭和40）年にまとめられた報告（文献3）でとりあげられた一部の遺物以外はほとんどが未整理の状態であった。

本研究室に保管されている楽浪土城出土品は一千点余りである。土器、瓦磚、各種土製品が主であり、このほかに鉄器、青銅器、骨角器、ガラス製品等がある。この中には、李氏朝鮮時代の貨幣や高麗・李朝期と思われる瓦など明らかに後世に属す遺物もあり、また磨製石器や無文土器など古い時期に属す可能性のある遺物も含まれている。

出土品の半数以上は、遺物自体または遺物を納めた封筒等への注記によって、その出土地点を知ることができる。出土地点の表示は、筆者が前稿（文献6）で明らかにした発掘調査時の区画によっており、従来の報告（文献3・9・10）とは合致しないものもある。出土状況に関する記録はほとんど残っておらず、出土層位や共伴関係は知ることができない。

つまり出土品のすべてが土城と関係をもつ遺物であるとは言えないのであり、個々の遺物ごとに土城との関係を明らかにしなくてはならない。しかし出土状況が詳しくは判らない以上、それは遺物自体の研究から導かれる遺物の年代が土城の存続期間内に入るかどうかという点から間接的に推

定するほかはないのである。

しかしその基準とすべき土城の存続期間と遺物の年代が、実は解決すべき課題なのである。楽浪土城は「楽浪太守章」の封泥や「楽浪富貴」「大晋元康（元康は西晋の年号、後290年～299年）」などの文字瓦当が出土することから、少なくとも三世紀末頃の楽浪郡治（郡の役所）であると考えられる<sup>17</sup>が、土城の築造と廃棄の年代は文献に記載がなく、その存続期間は郡の存続期間（前108年～後313年<sup>21</sup>）を大きく外れることはないと思像されるものの、今の所厳密には不明とする他はない。また土城出土品中には周辺地域にも類例が無く年代推定の手がかりを欠く特異な遺物も少なくない。

そこで当面は次の二つの仮定に立って記述を進めたい。その一つは、土城出土品の大半が楽浪土城と関係のある遺物であろうという仮定であり、もう一つは楽浪土城の存続年代は楽浪郡の存続年代と大きな食い違いはないであろうという仮定である。この二つの仮定は文献からみても考古学的資料からみても今の所おおむね妥当なものと思われる。要するに出土品の中で多数を占める遺物は楽浪土城に關係する遺物であり、かつ楽浪郡のころ<sup>21</sup>の遺物であると考えことにする。

## 1. 土器の質

楽浪土城址出土の土器は、胎土と焼成の違いによっていくつかに分類しうる。比較的数の多いものとしては、

1. 胎土が細かい灰色、灰褐色系統の軟質土器（以下軟質灰色系土器と呼ぶ）
2. 滑石粒を多量に含む胎土のやや粗い赤褐色ないし灰色の土器（以下滑石混入土器と呼ぶ）
3. 胎土が粗い白色の土器（以下白色土器と呼ぶ）

があげられる。このほかに硬質灰色土器、軟質赤褐色土器、施釉陶器、「無文土器」等もある。陶器や瓦器と呼ぶべきものもあるが、煩を避けるため土器と総称することにする。

## 2. 軟質灰色系土器

かつて関野貞博士（文献5）が、「薄手灰黒質陶器」とされた一群である。楽浪土城址出土の土器の大部分がこれに属する。

胎土はきめ細かく、砂はほとんど含まれない。色は灰色が基本である。表面の色は、黒色、暗灰色、灰褐色のものもあり、さまざまである。断面は灰色を呈するものが大部分である。厚手の破片では、断面の中央部分が周囲より暗い灰色となっているものが多い。灰色系の土器ではあるが軟質であり、中国の灰陶や朝鮮の陶質土器ほどの硬さはない。恐らく低温で還元炎焼成されたのであろう。器形や調整技法が良く似た個体同士でも焼成の状態は異なっている例があり、窯の技術が未熟で、焼成を十分に制御できなかったのではないかと想像される<sup>41</sup>。

成形の基本は粘土紐積み上げである。やや大きな土器には縄の叩き目や当板痕がみられることが多く、叩き板当板技法がかなり一般的に用いられていたようである。これに対して轆轤の技術は、

## 楽浪土城址出土の土器（上）

あまり発達していなかったようである。まったくの轆轤挽きによる成形は行われなかったようであり、また糸切り底はあるが、多くは静止糸切りで、回転糸切りは稀である。

整形・調整の技法としては木製の筥によると思われる削りと、回転を利用した（回転台か轆轤か判別しがたいが）とみられるよこなでが顕著である。そして一般に薄手に仕上げられている。

これらの土器は、轆轤によって成整形され灰色硬質に焼かれた漢代の一般の灰陶とはかなり異なったものである。管見によれば土城址出土の土器は漢墓に副葬された陶製の明器に近い。特に遼東半島先端部の塚室墓の副葬品の中には、質と製作技法の両面においてよく似たものがある<sup>5)</sup>。

### (1) 筒杯（図1・2，図版1・2）

円筒形の単純な器形の土器である。小片も含めて24点ある。他に類例の少ない器種で命名に苦しむが、中国漢代の墓の副葬土器の中に稀に類似したものがあり、中国人研究者はこれを筒杯と呼んでいる（文献13）ので、それに倣うことにする。

完形品および図上に復原の可能な破片でみると、直径は10～13cm、高さは7～10cmほどであり、大きさは大体同じである。器形や調整痕には若干の差異がみられるが、明快な分類は行いがたい。挿図では底部の調整痕に注目して配列してみた。図1には完形品またはそれに近いもの、図2には小片と口縁部を欠くものを集めてみた。

図1の1～3は底面全面に静止糸切りによると思われる一方向の調整痕を残すものである。

図1—1（図版1—1）はD<sup>3</sup>V区出土。やや外開きである。表面は暗灰色だが、断面は灰褐色である。内外面とも回転を利用した細かいよこなで痕がつき、底部内面には同心円状の起伏がみられる。側面下半は縦方向に筥削りされる（図版2—3）。底部には静止糸切り痕がみられる（図版2—5）。

図1—2（図版1—2）はD区域出土（注記はDのみである。以下D区域としたものはすべて同じ）<sup>6)</sup>。器形は円筒形に近い。側面と底面は黒灰色、内側は口縁附近が灰色でそれより下は灰褐色である。断面は中心部が明灰色、外側が明褐色である。やや突き出した体部下半は縦方向に筥削りされる。

図1—3（図版1—3）はD<sup>3</sup>V区出土。筒杯のなかでは最も薄手である。内外面とも灰色であるが、色調は均一でない。断面の色は図1—2と同じ。器の内面には所々に粘土紐の継ぎ目らしいものがみえ、また内面の体部下半には右上りの指押さえ痕が3cmほどの間隔でみられる。この土器の側面下半は筥削りされていない。

図1の4・5は、底部を静止糸切りしたのち、外周部を更に別のやや鋭い筥で削ったものである。

図1—4（図版1—4）はD<sup>3</sup>V区出土。やや歪んでいる。内外面、断面とも灰色で、他の土器より焼成が良い。側面下部は横方向に筥削りされている。削りの痕跡から、果物の皮をむくようにして削ったことがわかる（図版2—4）。

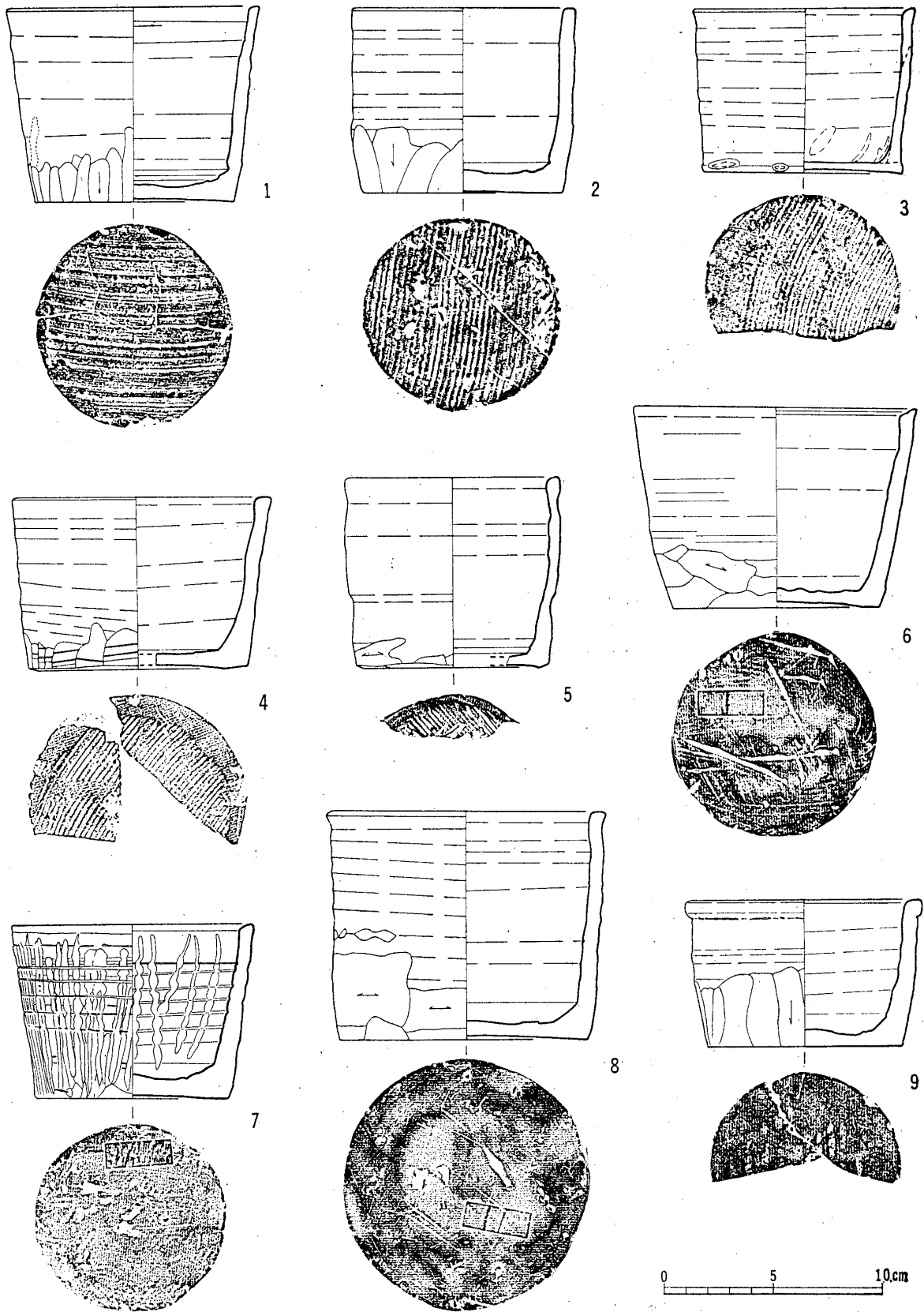


図1 楽浪土城址出土の筒坏 (1/3)

### 楽浪土城址出土の土器（上）

図1—5は破片からの復原図である。出土地点は不明。筒杯のなかでは変化のある側面を持つ。表面は内外面とも黒灰色、断面は灰色である。これも側面下部は横方向に篋削りされている。

図1の6～9は底部に複雑な調整が施されている一群である。

図1—6（図版1—5）はF<sub>4</sub>出土。外開きの器形で、内外面とも灰白色である。口縁上面に段がつくのは、他にみられない特徴である。側面下部の篋削りは横方向である。底部は、まず幅の狭い篋で大体同じ方向に何回か削られたのち、周縁部が篋削りされ、次に中央部が指先でなでられ、最後に先端の丸い工具で沈線が引かれたようである（図版2—6）。〔文献3 図版27—4〕

図1—7（図版1—6）はD<sup>2</sup>V区出土。内外面とも灰色である。内外面とも全面に幅2～3mmの篋でなでたような痕跡がみられる。側面下半に削り痕はみられない。底部は、幅が底径よりかなり狭い篋で、ほぼ同一方向に何回も削られたようである。〔文献3 図版27—3〕

図1—8（図版2—1）はF<sub>4</sub>トレンチ出土。出土品中最大である。表面は外面が灰黒色、内面が灰色である。側面下半のやや広い範囲に横方向の削り痕やなで痕がみられる。底部は先端の鋭い篋で何回か削られたようであるが、その痕跡は明瞭でない（図版2—7）。〔文献3 図版27—5〕

図1—9（図版2—2）はG区域北半出土。口縁が肥厚する唯一の例である。内外面、断面ともやや緑がかった灰色を呈する。側面下半の篋削りは縦方向である。底部には縄目の打捺紋をなでて不明瞭にしてしまったような痕跡がみられる。

図2は口縁部を欠くものおよび小片からの復原図である。

図2—1はD区域出土。表面、断面とも灰色で、焼成は良好、やや厚手である。側面には細かくやや深い擦痕が水平方向に走っている。側面下部には縦方向の篋削りがみられる。底面は図1—4のそれに似ている。

図2—2は出土地点不明。外面は灰色、器の内面は灰白色であり、断面は中心部が灰色、表面に近い側が灰白色である。側面下半は篋削りされているが、その方向は明瞭でない。底面中央がわずかに窪み、そこに篋の痕のようなものがかすかに残っている。周縁部は削りとなでによって平滑にされている。底部の内側には、回転を利用したなでの螺旋状の起伏がみられる。

図2—3も出土地点は不明である。内外面とも灰褐色であり、断面も外側は灰褐色、中心部は灰色である。側面下部には横または右下りの篋削りが部分的にみられる。底部はまず一方向に篋で調整され、そこに指なで痕が数条つけられてから、周縁部が削られたようである（図2—8）。

図2—4は小片からの復原図である。D区域出土。表面は内外面とも暗灰色、断面は中心部が濃灰色、表面に近い側が淡灰色を呈する。側面下部には横方向の削り痕がある。底面の形状は図1—4・5等に近い。

図2—5も小片からの復原図である。D<sup>2</sup>Ⅲ区出土。内外面とも灰褐色で、断面は灰色である。内面に右上りの平行沈線がみられるが、これは回転を利用して一回で引かれたものかもしれない。側面下部に篋削り痕はない。

図2—6は出土地点不明。質、製作技法ともに図2—3に似ている。

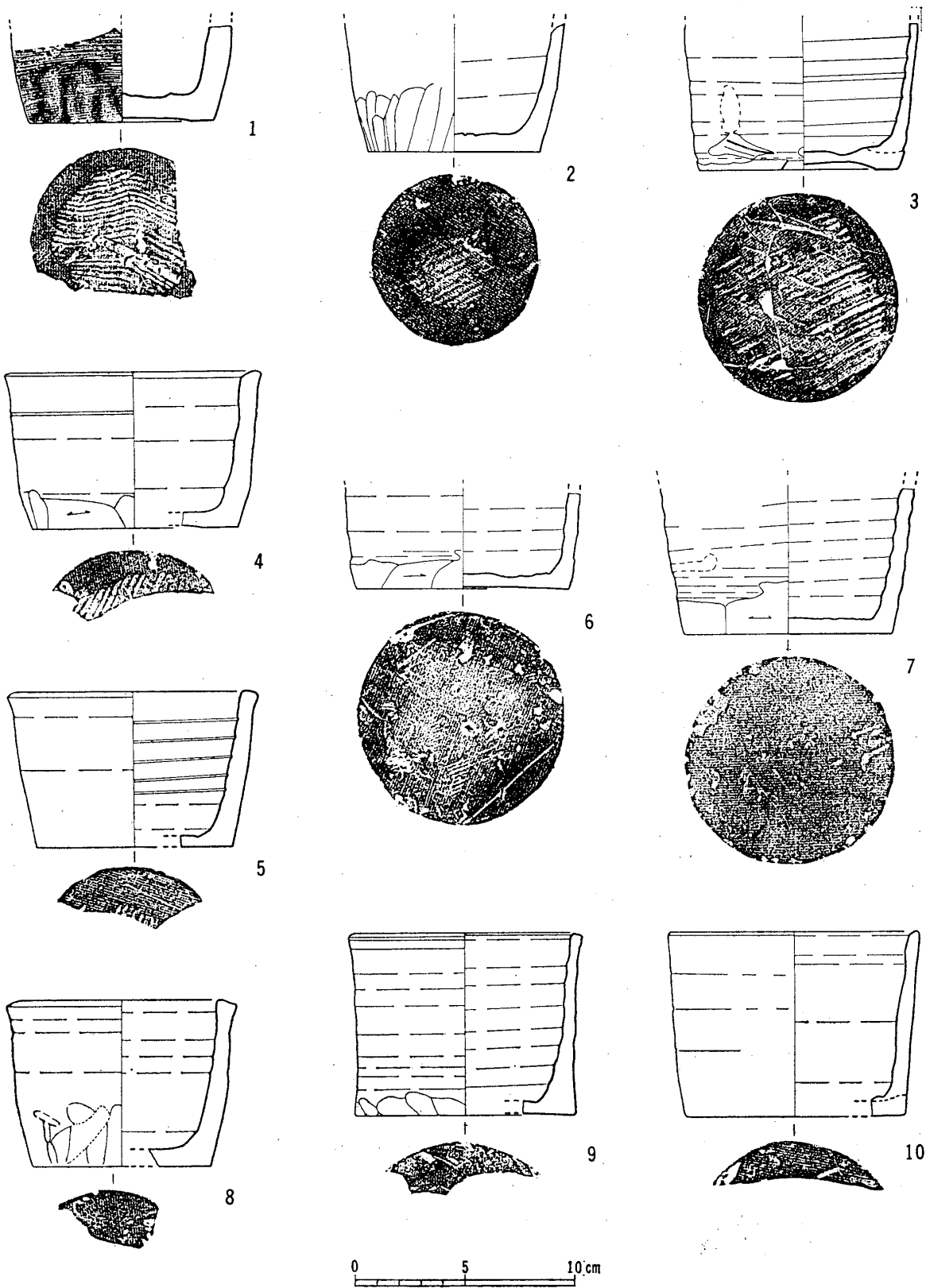


図2 栗浪土城出土の筒坏 (1/3)

### 楽浪土城址出土の土器（上）

図2—7も出土地点不明、図では最もよく残っている部分を折りかえして作図したが、実際はもっと円筒形に近かった可能性もある。外表面は灰色で内側は灰白色、断面は灰色である。側面下部は横方向に篋削りされる。底部はほとんど平滑である。

図2—8は小片からの復原図である。D<sup>2</sup>Ⅳ区出土。表面、断面とも灰色であるが、軟質である。体部下端には削りやなでが施されているが、痕跡は明瞭ではない。底部は残存部でみる限り平滑である。

図2—9はD区域出土。表面は灰色、断面は中心部が灰色で外側が灰褐色である。側面下部は篋削りされ、底部も何回か篋削りされている。

図2—10はD<sup>3</sup>Ⅳ区出土。表面、断面ともやや明るい灰色であるが、軟質である。

この他に小片が5点ある。そのうち3点は出土地点がわかる（E'トレンチ、D<sup>2</sup>Ⅳ区、D区域）。

#### 小 括

以上の土器は他に類例の少ない特異な形をしており、その性格は明らかでない<sup>7)</sup>。楽浪郡時代の墳墓からは同様の土器は出土していない。

筒杯はD区域から集中的に出土している。出土地点がわかる14点のうち11点がD区域出土であり、残りの3点もD区域に近いF区域やG区域北半から出土している。D区域には礎石列等があり、大規模な建物があったとみられる。もしそうだとすれば、筒杯はその建物となんらかの関係がある遺物かもしれない。

筆者は未見であるが、質と製作技法からみて、楽浪土城出土の筒杯とまったく同じと思われる土器が日本の福岡県糸島郡前原町三雲で発見されている（図3）。同町番上Ⅱ—5地区で発掘された土器溜状の遺構の弥生後期の土器を主体とする層から、朝鮮系外来土器、国内搬入土器とともに出土した。報告書によると

（この土器片は）円筒形土器の底部で底径8.8cm、現存高1.9cmをはかる。底面はナデや粗いハケ目かと思われる痕跡がある。体部は縦位にヘラケズリされ、幅1.5cm前後～1cmの面が18個存在する。内側は同心円状の強いナデが施され、回転台かロクロの使用をうかがわせる。胎土は緻密で砂粒はほとんど含まず、焼成良好で、外面は黒灰色、内面はくすんだ灰色を呈する。器面は平滑であり、楽浪系の軟質の土器である。出土層位は3層であるが、後期前半から中葉よりは下らないだろう。

（文献11、154頁）

という。楽浪土城址以外には類似の土器がみられないことからすれば、番上の土器を楽浪系とする報告者の見解は妥

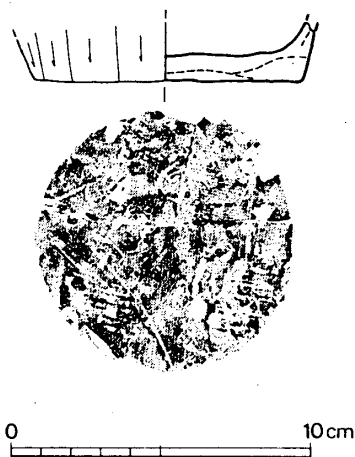


図3 福岡県糸島郡前原町三雲番上地区出土の筒杯（縮尺 1/3）

当なものと思われる。楽浪郡と北部九州の交渉を示すとともに、筒杯の年代の一端を示すものとして注目される。

(2) 豆 (図4・5, 図版3~6)

豆(高杯)とみられるものは39点ある。大きさは大差ないが、器形は変化に富む。全体を轆轤または回転台で仕上げたと思われるものは無い。ここでは杯部と脚部の区別が明瞭なものを豆A, 明瞭でないものを豆Bとする。豆Aはさらに杯部の仕上げに回転を利用しない A<sub>1</sub> と利用する A<sub>2</sub> に細分される。

豆 A<sub>1</sub>

杯部と脚部の区別が明瞭で、杯部の仕上げに回転を利用しないものである。

図4—1 (図版3—1) はE'VⅢ区出土。表面は淡灰色、断面は中心部が濃灰色で外側は淡灰色である。杯部は比較的整っているが、内外面ともに指押えの痕が多数みられる。脚部も外面には指押え痕がみられるが、内面は平滑に整えられている。杯部と脚部の境には爪の圧痕のようなものが多数つけられている。

図4—2 (図版3—3) はE'XⅡ区出土。表面は灰黒色、断面は濃灰色である。杯部は僅かしか残っていないが、その内外面に指押えの痕がみえる。脚部内面と杯部の底には連続する布目が圧印されており(図版3—4)、脚部が布を被せた型を用いて成形され、かつその型の上で杯部と接合されたことが考えられる。しかし現状では脚内面は整った形になってはいず、豆全体の形も歪んでいる。脚の外面には指押えの痕が歴然としている。脚の下端も整えられておらず、全体に非常に粗雑である。

図4—3 (図版3—2) はF<sub>2</sub>Ⅲ区出土。表面は淡褐色であり、断面の中心部は灰色である。杯部はほとんど欠けており、ごく一部で口縁が確認されるのみである。杯部と脚部の接合はかなりずれているらしく、図の杯部の復原はかなり推測的なものである。杯部の内外面、脚部外面には指押え痕が残っているのに対し、脚部の内面は比較的平滑に整えられている。脚部の下端には細い棒の圧痕のようなものがみられる。

図4—4 (図版4—1) はF<sub>3</sub>トレンチ出土。表面の色は、杯部内面が褐色である他は灰色である。杯部の内外面にはやはり指押え痕がみられるが、口縁上端と側面は篋削りされている。脚部外面は縦方向に篋削りされ、脚と杯との境はゆびなでされている。脚部内面の上部はよく整えられており、下部には縦長の指押え痕が並んでいる。脚下端は篋削りで整えられている。これも全体的に歪みがはげしい。〔文献2挿図314下, 文献3図版27—6〕

図4—5 (図版4—4) はE'トレンチ出土。表面は灰黒色、断面は濃灰色である。杯部内面には指押え痕が並ぶ。杯部外面の下部と脚はともに縦方向に篋削りされる。

図4—6 (図版4—3) は出土地点不詳。表面は灰白色、断面は灰色である。杯部内外面には指押え痕がみられ、脚部外面は篋削りされる。



楽浪土城址出土の土器（上）

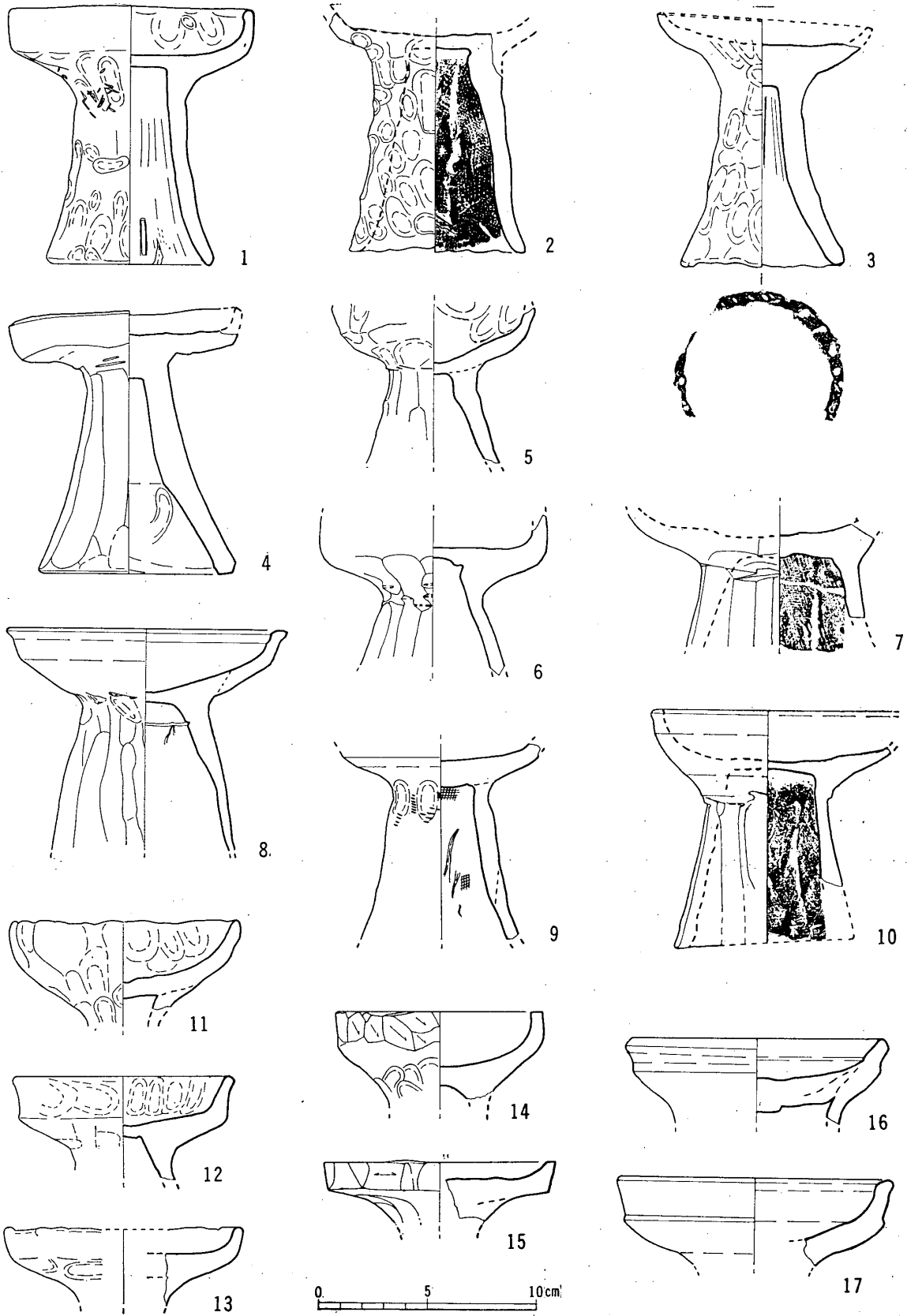


図4 楽浪土城址出土の豆（1/3）

図4—7（図版4—7，8）はF区域出土。表面，断面とも淡褐色である。杯部内面は不規則になでられている。杯部外面下部にはなで痕や削り痕がみられ，また一部に縄目の打捺紋とも見える跡がかすかに残っている。脚部は縦方向に篋削りされている。脚部内面と杯部の底には一続きの粗い布目と布の皺が圧印されており，図4—2と同様に，脚部の成形および脚部と杯部との接合に布を被せた型が用いられたことがわかる。この豆と図4—10とは，後者が篋の整形に回転を利用して点と灰黒色に焼き上げられている点を除いては，歪みの具合に至るまで酷似しており，同一の陶工の手になるものかと想像されるほどである。

図4—11～13は手づくねの杯部の破片である。

図4—11（図版4—5）はD<sup>3</sup>Ⅲ区出土。表面は淡灰色，断面は灰色である。内外面とも指押え痕が明瞭であるが，全体の形は比較的整っている。脚部との接合部が細かいのが特徴である。図4—12（図版4—2）はE'トレンチ出土。表面，断面とも灰色である。指押え痕は浅くあまり目立たない。図4—13もE'トレンチ出土。灰色。これも指押え痕はあまり目立たない。

図4—14（図版4—6）はE'Ⅴ区出土。表面，断面ともに灰色である。杯部の内面はなでによって整えられている。口縁上端は篋削りによって平坦にされ，杯部側面は右下り方向に篋削りされている。杯部の下部には指押え痕が密集している。

図4—15はD<sup>2</sup>Ⅳ区出土。表面は明褐色，断面は灰色である。杯部の内側には指押え痕がみられる。口縁上端は篋削りされ，杯部側面は横方向に，杯部の下部は縦方向に篋削りされている。

この他にA<sub>1</sub>に属す破片が2点ある。1点はE'トレンチ出土，もう1点は出土地点不明である。

#### 豆 A<sub>2</sub>

杯部と脚部の区別が明瞭で，杯部の仕上げに回転を利用したものである。

図4—8（図版5—4）はF区域出土。図の杯部はわずかに残っている部分から復原した。表面は灰褐色，断面は大体淡い赤褐色であるが厚い部分では中心部が灰色になっている。杯部の内外面には全面に整った横方向のなで痕がついており，この杯部が回転を利用して仕上げられたことがわかる。脚部の外面は縦方向に篋削りされており，ささくれた篋先によると思われる擦痕が多数みられる。脚部内面はなめらかに仕上げられている。

図4—9（図版5—5）はEⅢ区出土。杯部内外面と脚部外面は黒灰色，脚部内面と断面は灰色である。杯部はほとんど残っていないが，底部内面には同心円状のなで痕がみられ，杯部が回転を利用して仕上げられたことがわかる。脚部は篋削りされたあとでなでられたようである。杯部と脚部の接合部には指押え痕があり，その周囲には木ッ端を押しつけたような長さ2～3mmの横方向の短い凹線が縦に並んでいる。脚の内面には布目と布の皺の圧痕がみられるが，上からなでられているので，明瞭なのは一部分にすぎない。

図4—10（図版5—1）はE'ⅩⅧ区出土。表面は黒灰色，断面は灰色である。杯部の内外面全面に横方向のなで痕がついている。脚部は縦方向に篋削りされる。脚部の内面には布目および布の皺が圧印されているが，杯の底部には布目がみられない（図版5—2）。脚部下端は篋で切り整

## 楽浪土城址出土の土器（上）

えられている。杯部と脚部の接合は中心が合っていないうえに、脚部下端も斜めに切られているので、普通に立てると杯部は大きく傾く。

図4—16, 17は回転を利用して仕上げたとみられる杯部の破片である。

図4—16（図版5—6）はBⅧ区出土。表面は灰褐色，断面は灰色である。断面でみる限りでは、外開きの円筒に円板状の粘土を嵌め込んだように見える。

図4—17（図版5—7）には「表採」と注記されている。杯部の外面は灰色，内面は暗褐色である。断面は明るい褐色であるが、特に厚い部分では中心部が灰色を呈する。

この他にも豆A<sub>2</sub>に属す小片が1片ある。D区域出土で、図4—9に近いものらしい。

### 豆Aの脚部

図5—1～5は豆Aの脚部と思われるものである。

図5—1（図版6—1）には「B'溝」と注記されている。表面，断面ともに灰色である。杯部と脚部の接合部に盛られた粘土によって花卉状の紋様（？）が作られている。僅かに残っている杯部の内面のなで痕からみるとA<sub>2</sub>に属すものかと思われる。

図5—2（図版5—3）はG XXVI区出土。表面は明灰色，断面は灰色である。外面はなでられて平滑になっている。脚部の内面上部，杯部との接合部には指押え痕がみられる。杯部内面のなで痕は方向が一定でなく，A<sub>1</sub>に属すものとみられる。

図5—3（図版6—2）はE'トレンチ出土。杯部内外面と脚部外面は灰黒色，脚部内面と断面は灰褐色である。脚の外面は縦方向に篋削りされ，削り痕の幅は3～7mm程度である。脚部の内面は平滑に整えられている。杯部内面にも細かい篋削り痕があり，これもA<sub>1</sub>に属すべきものと思われる。

図5—4（図版6—3）はD<sup>2</sup>I区出土。表面は灰褐色，断面はくすんだ黄褐色である。胎土はやや粗く，焼成も他とは若干異なるようである。内外面ともに整ったよこなで痕がみられ，また内面には螺旋状のしぼり痕がある。質，製作技法ともに他の豆とは差異があるように思われる。

図5—5（図版6—4）はE'トレンチ出土。表面，断面とも灰色である。脚部外面には指押え痕や縦方向の篋削り痕がみられるが，あまり明瞭ではない。脚部内面には縦方向に強く指なでしたような痕跡がある。脚部下端は特に整えられてはいない。

### 豆B

径の大きな脚部がなめらかに杯部に接合するため，杯部と脚部の境が明瞭でないものである。豆ではなく，器台もしくは灯のようなものと考えられなくもないが，本研究室の土城出土品にはこれと対応しそうな小形丸底の器はなく，またこれらの杯部には煤や油の痕跡もみられない。これも供献用の豆と考えておく。

破片も含めて19点出土しているが，大きさ・形態・製作技法ともすべてきわめてよく似ている。杯部は直径10cmほどで回転を利用して仕上げられ，脚部の外面は縦方向に篋削りされている。総高は約10cmである。

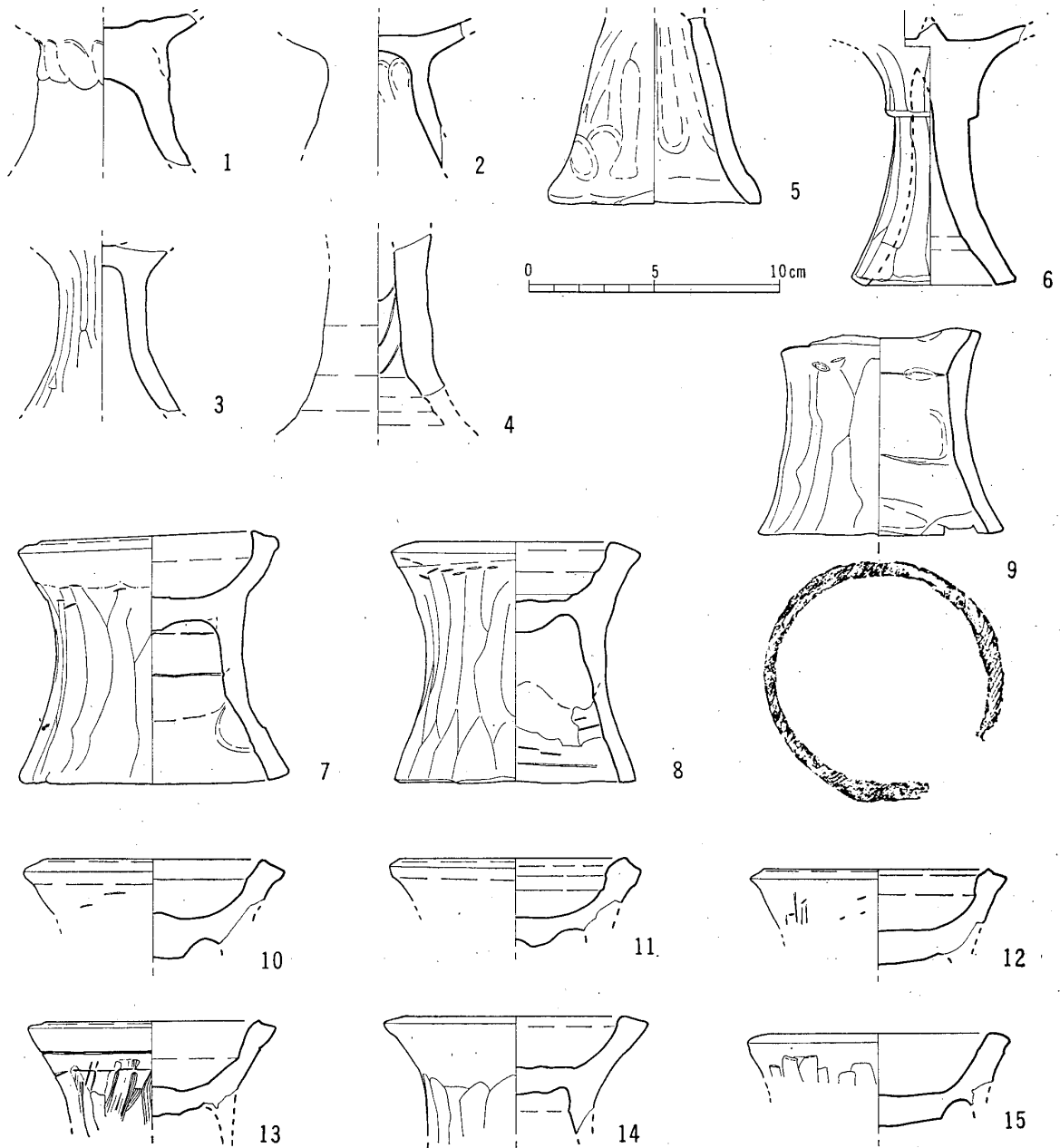


図5 楽浪土城址出土の豆・灯 (1/3)

図5—7 (図版6—6)はE'X II区出土。表面は灰黒色であるが、断面は褐色である。篋削り痕は杯部の下部に達しており、篋削りが杯部と脚部の接合の後に行われたことを示している。篋削り痕の上端には爪型の圧痕がみられるが、これは削りの際に篋先を押しつけたためついたものであろう。脚部の横断面は楕円形になっており、脚部下端では長径10.5cm, 短径10cm弱である (挿図・写真とも長径の方を示した)。脚部内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭に残っている。脚部と杯部の接

楽浪土城址出土の土器（上）

合部の内面は横方向に強く調整されている。脚部下端は篋削りされており、木目の擦痕のような痕跡が残っている部分がある。〔文献3 図14, 同図版27—4〕

図5—8は D<sup>3</sup>V 区出土。表面の色にはむらがあり、褐色・灰色・暗灰色等の部分がある。断面は灰色である。その他は図5—7とほとんど同じである。

図5—9（図版6—8）はD区域出土。豆Bの杯部がとれて脚部のみ残ったものらしく、杯部のみ残っているものとよく合う。表面は灰褐色である。脚部下端には糸切り痕とみられる痕跡がある。

図5—10~15は豆Bの杯部のみが残っているものである。10はD区域出土。色は灰褐色である。11（図版6—7）は出土地点不明で灰色。12は E' トレンチ出土で灰色、縦方向の擦痕がみられる。13は出土地点不明の灰色の土器。焼成は良くやや硬質である。14は E' XIV 区出土。これも灰色の土器である。篋削り痕の木目は13ほどには目立たない。15は D<sup>4</sup>III 区出土。灰色の土器だが軟質で調整痕もはっきりしていない。

この他の破片9点もきわめてよく似ている。出土地点は E' トレンチ5点, E' XIV 区1点, 不明3点である。

小括

今のところ土城出土の豆の年代を推定する直接的な手がかりはない。楽浪郡時代の墳墓から土製の豆が出土したことは無い。後漢前半と考えられる王光墓からは木製の豆が出土しているが器形は大分違っている（文献1）。

しかし質と製作技法が他の軟質灰色系土器と共通すること、出土状況に特に問題はなかったらしいことなどからすれば、豆も他の土器の大部分と同様に楽浪郡の頃のものと考えて良いと思われる。特に布を被せた型の上で成形する技法（図4—7, 図版4—7, 8）が楽浪郡時代の瓦や墳墓に副葬された土器にもみられる（文献7）ことは有力な傍証である。

中国の中原では陶製の豆は戦国時代から前漢前期にかけて盛んに用いられたものの、前漢中期には消滅したという（文献12, 14）。土城址出土の豆が楽浪郡時代のものとすれば、漢の東端に位置した楽浪では、中原で陶製の豆が消滅した後もなお土製の豆が作られていたことになる。

土城出土の豆の分布にも偏りがみられる。出土地点の判明している32点のうち半数の16点は E' トレンチ出土であり、他はD区域7点, F区域4点等となっている。A<sub>1</sub>, A<sub>2</sub>, Bについてみると

	E' トレンチ	D区域	F区域	その他
豆A <sub>1</sub> : 6 (+1)		2	3	0 (+1)
豆A <sub>2</sub> : 1		1	1	2 (+1)
豆B : 9		4	0	0

（括弧内は脚部破片から推定されるもの）

とやや差はあるが、豆 A<sub>1</sub> と豆Bでは E' トレンチ出土のものが際立って多い。この分布をみる限り、豆Aも豆Bも用途は同じであったか、あるいはともに一つのセットを構成する要素であったか、ともかく同様の性格のものであったと考えたい。

豆が E' トレンチを中心に分布することは、筒杯が D 区域に集中することと対照的である。D 区域には大規模な建物があったと考えられるのに対して、E・E' トレンチでは特に目立った遺構は見出されなかった（文献 6）ことも、豆の用途、性格を考えるうえで参考になるであろう。

土城出土の豆に特徴的なことは、作りが雑なことである。指押え痕が目立つものや、著しく歪んだものが少なくない。これは中国本土の陶器と比べるまでもなく、土城址出土の他の土器にも類例を見出し難い特異な現象である。これは陶工の技術水準の低さによるというより、むしろ故意に粗雑に作ったのではないかと疑われる。祭祀などのためになんらかの理由で特に粗雑に作ったという可能性を考えたい。

### (3) 灯? (図 5—6, 図版 6—5)

F<sub>4</sub> で 1 点出土した。表面は灰黒色、断面は灰色である。杯部中央に突起があるが、先の部分は折れて無くなっている。恐らく灯のようなものであったと思われる。突起の残存部は幅 3 mm ほどに細かく篋削りされ、杯部の上面は突起を中心に放射状になでられている。体部は縦方向に篋削りされる。稜はかなり鋭いが、削られた面に木目の擦痕のようなものがみられることから、やはり木製の篋を用いたようである。脚の下端も篋削りによって整えられている。体部の中に丸い穴が斜めにかかなり深く入っているが、これは先の鋭った径 7 mm ほどの棒を突きさし、この棒を支えにしてこの土器を成整形したことを示すものであろう。

#### 小括

この土器も他に類例がないが、質や調整技法が土城出土の他の土器と同じであることから、やはり楽浪郡の頃のものと考えたい。  
(以下次号)

#### 註

- 1) 最近一部で楽浪郡が設置されたのは平壤一帯ではなく中国遼寧省方面であり、楽浪土城は楽浪郡とは関係のない「楽浪国」の遺跡であるという説が主張されているが、筆者は同意できない。このことは前稿（文献 6）で触れておいた。
- 2) 楽浪郡の滅亡（厳密には郡治の遼東方面への移転）を後 313 年とする『資治通鑑』の記載には疑問も出されている（文献 4）がここでは一応通説に従っておく。
- 3) 筆者は、土城が楽浪郡設置以前に築造された可能性も、郡の滅亡後も一定期間使用された可能性もあると考えており、あえて曖昧な語を用いることにする。
- 4) 土城出土の瓦でも同様の現象がみられる。これらは楽浪郡の技術水準を考える際に参考となろう。
- 5) たとえば京都大学文学部考古学研究所蔵の中国遼寧省大連市牧城駅塚室墓出土品（文献 7）があげられる。
- 6) D トレンチ出土と考えられなくもないが、“D” とのみ書かれた遺物の多くが D 区域の発掘の行われた 1935（昭和 10）年秋の新聞紙に包まれていたこと、同じ時期の新聞紙に包まれていた遺物で出土地点が明確なものはすべて D 区域が掘られた第二次調査の発掘区から出土していることから、D 区域出土と判断した。
- 7) 器形の類似する中国河南省洛陽市焼溝の漢墓から出土した「筒杯」のほとんどは内面に朱が塗られてお

## 楽浪土城址出土の土器（上）

り（文献10）、漆器の卮を模したものと考えられる。土城出土の筒杯には彩色の認められるものは無く、両者の関係は不明である。

### 文 献（本号掲載分のみ）

〔日本文〕

- 1 小場恒吉、榎本亀次郎『楽浪王光墓』（古蹟調査報告第二）1935 京城，朝鮮古蹟研究会
- 2 駒井和愛「漢文化の移植」『世界考古学大系 第7巻 東アジアⅢ 漢・南北朝・隋・唐時代』1959 東京 112～117頁
- 3 同上『楽浪郡治址』（考古学研究第三冊）1965 東京（同『中国都城・渤海研究』1977 東京 85～119頁 再録）
- 4 末松保和「日韓関係」『岩波講座 日本歴史 第一巻』1933 東京
- 5 関野貞ほか『楽浪郡時代の遺蹟』（古蹟調査特別報告第4冊）1927 京城，朝鮮総督府
- 6 谷豊信「楽浪土城址の発掘とその遺構——楽浪土城研究その1——」『東京大学考古学研究室紀要』第2号 1983 東京 129～155頁
- 7 同上「西晋以前の中国の造瓦技法について」『考古学雑誌』第69巻第3号 1984，東京，70～97頁
- 8 浜田耕作・島田貞彦『南山裡』（東方考古学叢刊第三冊）1933，東京・京都，東亜考古学会
- 9 原田淑人・駒井和愛「昭和九年度同十年度土城址の調査」『古蹟調査概報 楽浪遺蹟 昭和十年度』1936，京城，33～47頁
- 10 原田淑人ほか「楽浪土城址の調査（概報）」『昭和十二年度古蹟調査報告』1938，京城，103～105頁
- 11 福岡県教育委員会『三雲遺蹟Ⅲ 糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査』（福岡県文化財調査報告書第63集）1982 福岡

〔中国文〕

- 12 中国科学院考古学研究所『洛陽中州路（西工段）』（中国田野考古報告集考古学專刊丁種第4号）1959 北京
- 13 中国科学院考古研究所編『洛陽燒溝漢墓』（中国田野考古報告集考古学專刊丁種第六号）1959 北京

〔英文〕

- 14 Wang Zhongshu (王仲殊) *Han Civilization* 1982 Hew Haven and London: Yale University Press

Pottery from the Site of the Lelang Provincial Office in  
Pyongyang, North Korea, the Eastern Outpost of the Chinese  
Empire from the First Century B. C. to the Fourth Century A. D.

( I )

TANI Toyonobu

Lelang (Lo-lang) Province, which was located in northern Korea, was the eastern clonial outpost of the Han, Wei and Western Jin dynasties. It was established in 108 B. C. after the conquest of this region by the Western Han, and lasted until 313 A.D. The site of the Lelang Provincial office in Pyongyang was excavated by Japanese scholars in 1935 and 1937, and the excavated finds have been preserved in the University of Tokyo (Komai 1965, Tani 1983). Examining these finds, the author intends to clarify the characteristics of the Lelang culture as a local culture of ancient Chinese civilization, and to study the cultural relations among the province, southern Korea and Japan. In the present paper, one part of the pottery vessels are described. The rest shall be described in the next issue.

I. Physical Properties of the Pottery

The pottery is classified into several groups according to physical properties. Three major groups are;

1. soft gray pottery
2. brown or gray pottery with considerable talcum particles
3. white coarse pottery

Other than these, there are hard gray pottery, soft brown pottery and glazed pottery, but each small in quantity.

II. Soft Gray Pottery

Most of the pottery found at the site belongs to this category. It is made of fine levigated clay without sand particles. The color of the vessels is gray, but varies from whitish to blackish. The texture is softer than that of the gray pottery which was used in the Central Plains of China during the Han dynasty. Color and hardness indicate that this kind of pottery was fired in a reducing atmosphere at relatively low temperatures. Variations in the shade suggest that firing was relatively uncontrolled.

Coiling and beating are fundamental forming techniques. The walls are usually smoothed



by pinching and rotating. The lower parts of the vessels are often trimmed with wooden knives.

The soft gray pottery of Lelang is more similar to the funerary pottery excavated in Han tombs of Liaoning peninsula (Hamada and Shimada 1933), both in respect to texture and manufacturing techniques than to the gray pottery in the Central Plains.

(1) *Tongbei* [cylindrical cup] (Figs. 1, 2; Pls. 1, 2)

The vessels of this shape are rarely seen in surrounding areas.

Most of these vessels were concentrated in area D of the site, where large buildings of the Provincial office stood. This disposition would suggest use of the vessels in those buildings.

Figure 3 is a fragment of a *tongbei* excavated in northern Kyushu in Japan (Fukuoka-ken Kyoiku Iinkai 1982). This is one of artifacts suggesting contacts between Lelang and northern Kyushu.

(2) *Dou* [footed bowl] (Figs. 4, 5; Pls. 3-6 except Fig. 5:6 and Pl. 6:5)

One half of all *dous* excavated were unearthed in trench E' where no buildings were found.

One of the characteristics of the excavated pottery *dous* is unusual roughness both in form and finish. They may have been intentionally made roughly for a special purpose, since similar roughness cannot be seen in other vessels of this site.

In the Central Plains, the pottery *dou* was popular in the Warring States period and frequently seen in the early Western Han, but not long thereafter it disappeared (Wang 1982). As the province was established during the middle Western Han period, it is deduced that the pottery *dou* survived longer in Lelang Province than in the Central Plains.

(3) *Deng* [lamp] (Fig. 5:6; Pl. 6:5)

One broken artifact is most probably a *deng*.

(continue to the next issue)

Literature Cited

- Fukuoka-ken Kyoiku Iinkai 1982 Mikumo Iseki III, *Fukuoka-ken Bunkazai Chosa Hokoku* 63, Fukuoka
- Komai, K. 1965 *Rakuro Gunchi Shi*, *Kokogaku Kenkyu* 3, the University of Tokyo, the Department of Archaeology
- Hamada, K. and Shimada, S. 1933 *Nan-Shan-Li*, *Toho Kokogaku Sokan (Archaeologia Orientalis)* III, Tokyo and Kyoto, Toa-Kokogaku-Kuai (the Far-Eastern Archaeology Society)
- Tani, T. 1983 *Monument of Le-lang Provincial Office*, Pyongyang, North Korea, *Kokogaku*

谷 豊 信

*Kenkyushitsu Kiyo (Buletin of the Department of Archaeology) 2, the University of Tokyo*

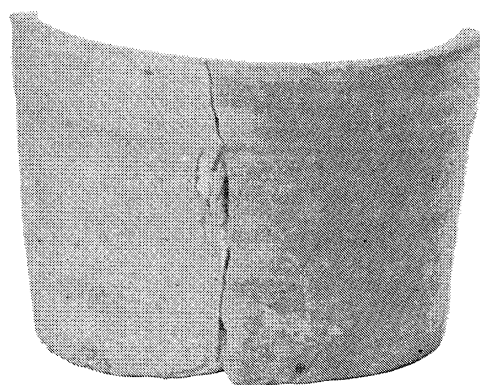
Wang, Z. 1982 *Han Civilization*, New Haven and London: Yale University Press

楽浪土城址出土の土器（上）

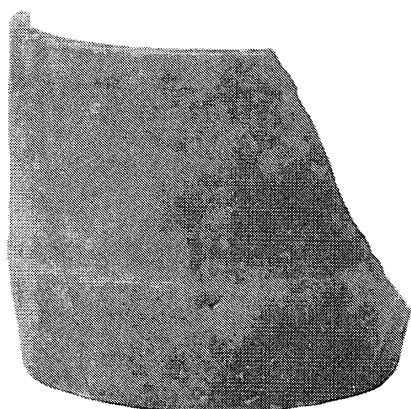
（図版1）



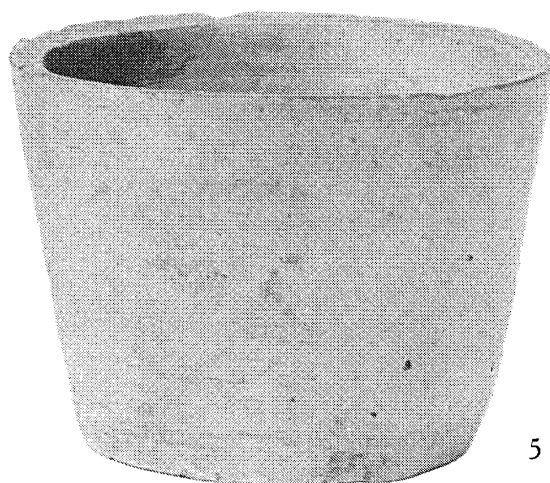
1



4



2



5



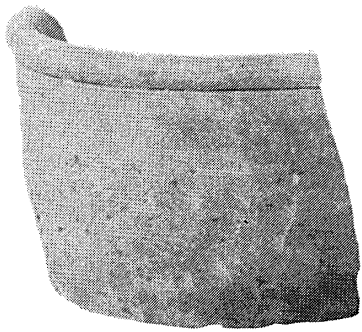
3



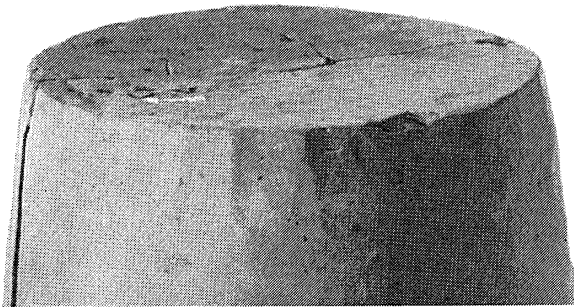
6



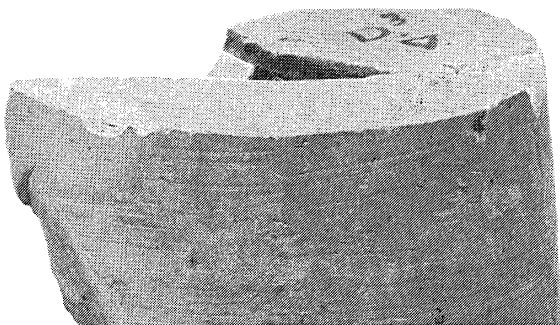
1



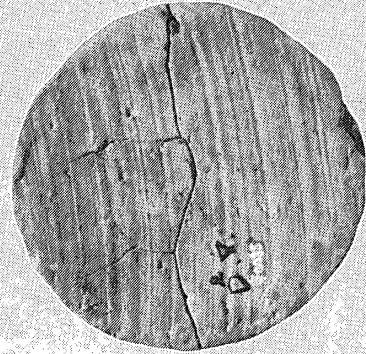
2



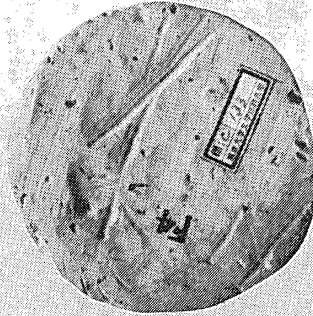
3



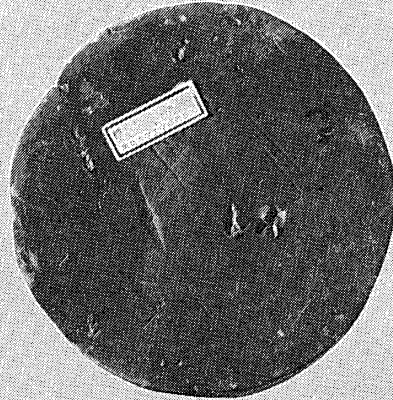
4



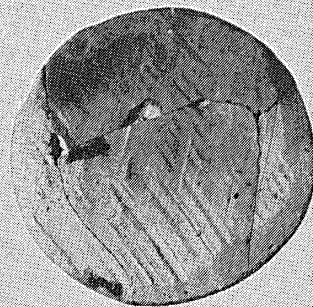
5



6



7

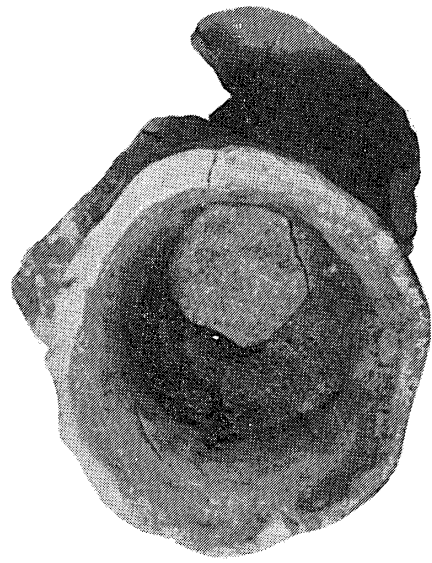
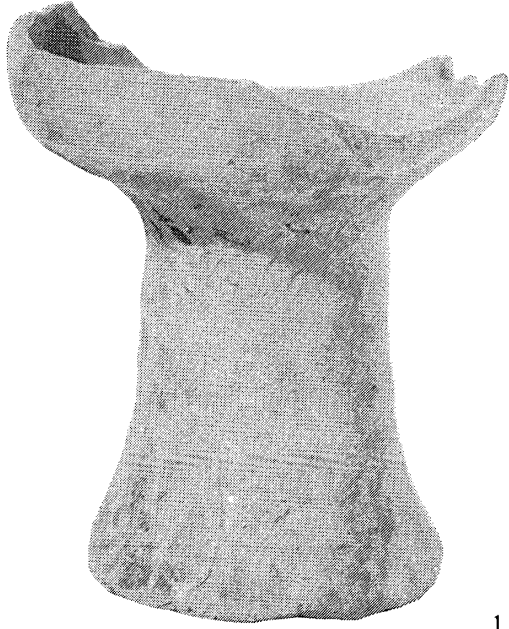


8

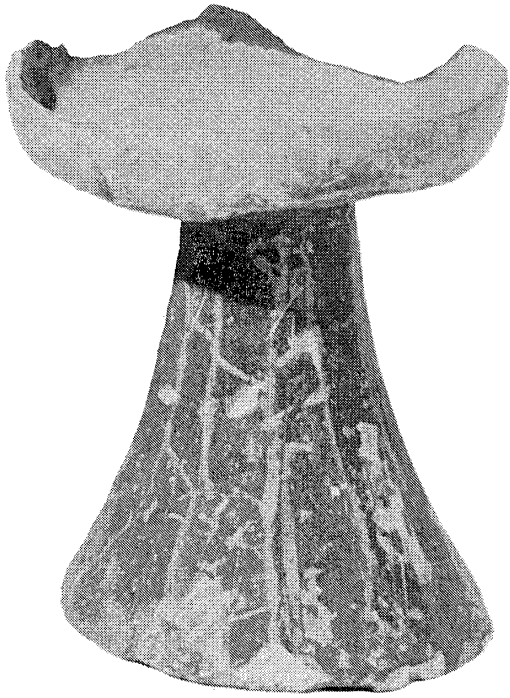
楽浪土城址出土の筒杯およびその細部

楽浪土城址出土の土器（上）

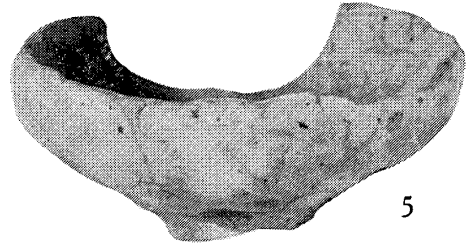
（図版3）



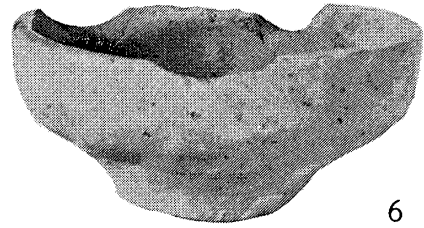




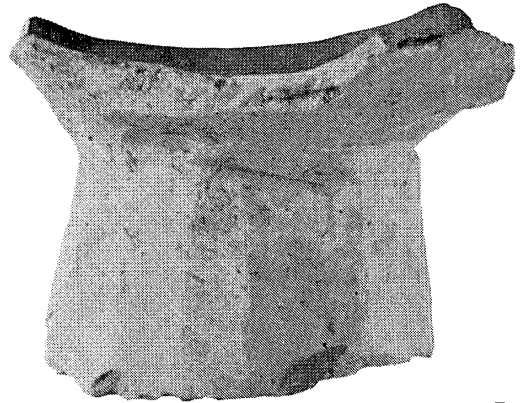
1



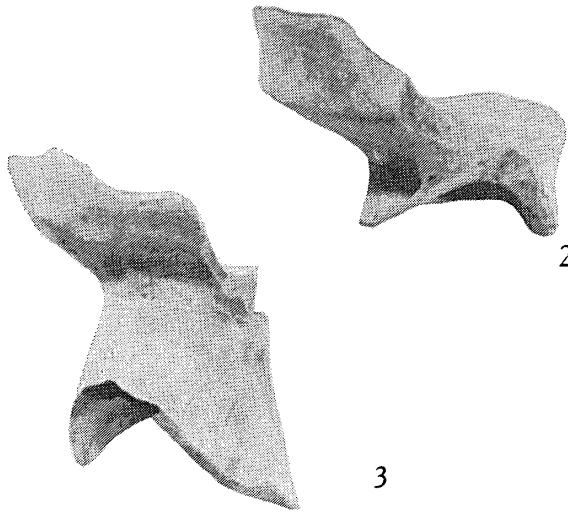
5



6

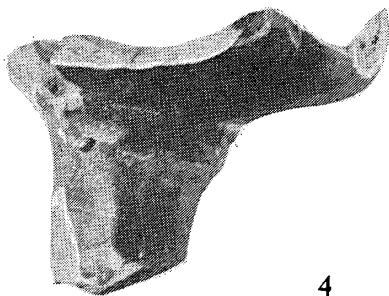


7



2

3



4



8

楽浪土城址出土の土器（上）

（図版5）



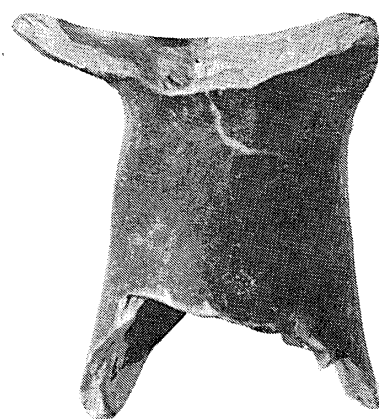
1



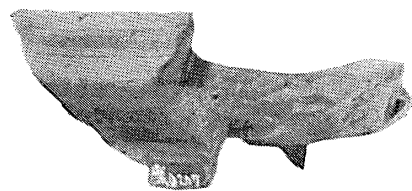
4



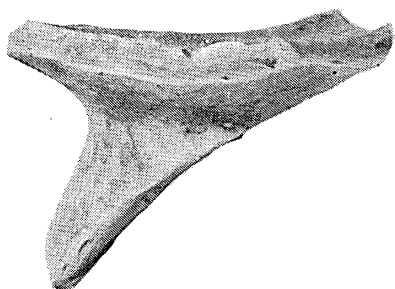
2



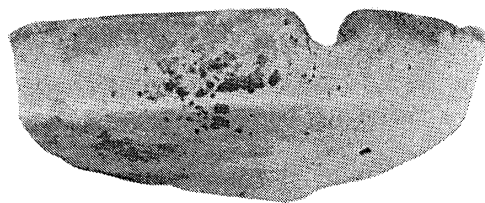
5



6



3



7

